



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3865号 2017.8.29 発行



【依存～溺れるネット世界(1)】スマホゲーム「無間地獄」 FGOにはまり際限なく高額利用 産経新聞 2017年8月21日
両親のクレジットカードを使い、スマートフォンゲームの「課金」を繰り返す若者は後を絶たない(写真と本文は関係ありません)

誰もが、どこでもスマートフォンを手に行っている光景が当たり前となり、インターネットの世界と切っても切れない関係となった現代。そこにもゲームといった依存に陥る構造が存在する。彼らはどのようにして溺れたのか。

有料くじ「ガチャ」夢中に 仮想世界のヒーローになるために

宇野築(25)＝大阪市旭区＝は大学卒業後、障害者支援施設でアルバイトを始めた。働き始めて4カ月ほどが経過したころ、突然体調を崩して働けなくなった。自宅療養に切り替えたとき、気晴らしに始めたスマートフォンのロールプレイングゲーム(RPG)「フェイトグランドオーダー」(FGO)などに、はまった。

RPGは、架空の設定のもと、ゲーム参加者が登場人物を操作し、戦いや謎解きを通し、アイテムなどを手に入れるゲームだ。ゲームを有利に進められる武器などが手に入る有料くじ「ガチャ」があり、宇野はその獲得に夢中になった。

就職に失敗し、アルバイトをしたが、わずか4カ月で体調を崩した。一度も実家を出たことがなく、友人ら周囲とうまく折り合えなかった。しかし、ほとんど何もできなかった現実とは違い、自分を大きく見せられ、優越感に浸れるゲームもあった。そのためにはガチャが欠かせなかった。

父母のクレジットカード使い、欲しいもの必ず手に入れる

数カ月後に同じアイテムを獲得できたり、他のプレイヤーと交換できたりするケースもあるが、宇野がはまったガチャは獲得のチャンスが一度しかなく、期間中、欲しいものは何回でも挑戦した。1回300円。初回で引ければもうけものだが、うまくはいかない。

アイテムは月に2回は更新され、投じる金はかさんだが、仮想の世界でヒーローであり続けることに比べれば、問題ではなかった。

気づけば、父のクレジットカードの1カ月の上限額50万円、母の80万円を全部つぎ込んでいた。両親に怒られ、上限を10万円に引き下げられたが、カード利用明細書を両親より先に郵便受けから奪い、発見を遅らすなどして、その後も没頭した。

「現金を手に行していないから、使っている実感や罪悪感がなかった」

7割がスマホゲーム経験者 高額課金の相談増える

消費者庁の委託を受け三菱総合研究所が昨年まとめた「スマホゲームの動向」によると、スマホゲーム市場は、平成24年の4448億円から26年は7154億円に膨らんでいる。

スマホ利用者のうち、スマホゲーム経験者は68.9%に達し、うちネットの世界で料金を支払うことを意味する「課金」の経験があるのは24.3%。ガチャなどが多くを占め、目的は宇野のように「欲しいキャラクターやアイテムがある」が5割弱に上る。

一方、業界は、24年ごろに高額な利用料の保護者への請求が頻発した問題を受け、有料サービス利用時に未成年者の確認徹底や、ガチャアイテム取得までの推計金額の上限を、1回の額の100倍以内とするなどガイドラインを作成し対策に乗り出した。

しかしいまでも、アイテムを手に入れようとすると多額を投じなければならない構造に変わりはなく、また、若者らが親のカードを使うなどして料金を支払い続けるケースは後を絶たない。

国民生活センターによると、オンラインゲームに関する相談は、25年度の5932件をピークに減少したものの、28年度は4083件と、依然高水準。高額課金の相談が目立つ。

「どんどん吸い寄せられる」

「無間（むげん）地獄」。インターネット依存患者の治療を続けている大阪市立大付属病院（大阪市阿倍野区）の医師、片上素久（もとひさ）は、最近のゲームをこう評する。

今のゲームは、やめる機会がつかめないという。例えば、ゲーム内で知り合った仲間と数人単位でチームを組んで行う対戦型にはまると、そこから抜けられなくなる。片上はその状態を「（ゲームに）どんどん吸い寄せられる」と表現する。

受験の失敗や授業についていけない、友人との関係がうまくいかないといった、誰もが経験するような不安要素が加わると、現実から目をそらすように、さらに深みにはまる。遅刻や欠席といった生活に障害を来すようになり、依存症に陥る。宇野のように、カード上限を使って初めて親が気づく場合も多い。

片上のもとには年数十人ほどの新たな患者が訪れる。その大半は中高生だ。スマホの低年齢化は進み、ネット依存は今後も増えるとみられる。「子供にとって一番大事な時期を台無しにする。ゲームの規制を考える必要がある」。片上は警鐘を鳴らしている。

初めてのアルバイト、4カ月で過呼吸に

両親のカードを上限いっぱいまで使い、スマートフォンのゲームにつき込んだ宇野は、なぜ、こんなにもネットゲームにのめり込むに至ったかの答えを、今も探し続けている。

初めて携帯を手にしたのは中学3年で、高校受験を前に神戸の塾に通うための連絡用として親に持たせてもらった。以来、大学4年になるまで、少しはゲームの料金を支払うこともあったが、歯止めは利いていた。

だが、卒業して半年がたったころに体調を崩し、自宅で療養した。これまで一度も実家を出たことはなく、「遊びと勉強を両立できる」とも思えず、アルバイトをしたこともなかった。両親に甘えることができる生活環境に浸っていたことが影響したのかもしれない。

大学で就職活動をして10社弱くらい受けたが、内定はもらえなかった。周囲で内定を得たのは数人だけ。それもまた「何が何でも就職しなければいけない」という気が起きなかった理由だ。何より両親からせかされることがなかった。

それでも、「自分の小遣いくらいは、もう自分で稼ごうか」と、おばに誘われた障害者支援施設で気軽にアルバイトを始めた。

初めて関わる“外”の世界。興味もあったが、コミュニケーションが難しい利用者と作業するだけではなく、納期を守ったり、利用者の体調に気がつかったりするのは楽ではなかった。ストレスや疲労がたまったのか、約4カ月後に手足のしびれや過呼吸に陥り、自宅のベッドから3カ月まともに動けなくなった。

片上によると、患者の家族の大半は、宇野のように、比較的経済的に恵まれた核家族が多いという。

「課金」ルール4割野放し、治療放棄も4割

三菱総合研究所のアンケートでも、未成年のうち6割程度は、課金などについて一定のルールを設定されているが、4割は野放しの状態だ。

片上によると、父が単身赴任などで家庭をあけ、母は子育ての不安から子供に口うるさくダメだしするなどし、子供が自分の意見を言えなくなって殻に閉じ籠もるケースも目立つ。

「自分に自信が持てず、ちょっとした問題でも、どうしてよいか分からなくなり、ネットに逃げ道を見いだす。ネットからアルコールやギャンブル、薬物に移る場合もある」。片上はそう説明する。

回復には、心の葛藤を解きほぐすとともに、約束事をきちんと決めるといった父親の機能不全の解消を含めた家庭の再構築が必要だとされる。

片上のもとを訪れる患者のうち3割ほどは回復に向かうが、4割は途中で治療を放棄して、再びネット依存の道へと戻る。

甘えていた生活改めたい

宇野は、実に2年半も両親のカードを使う生活を続けた後、堪忍袋の緒が切れた母から「もう家に置いておけない」と沖縄の支援施設に送られた。

そのとき、優しい父が初めてものすごい形相で怒った。半ば勘当された形となったが、施設に行く際、両親は見えなくなるまで自分を見送ってくれた。

今、自らの心の葛藤も、ゲームにのめり込んだ理由もまだ見つけ出せていない。だが、答えを見つけ、これまでの甘えていた生活を改め、家族と向き合いたいと思う。

「大事にされてきたんだと、今では罪悪感を覚えている。家族のもとに戻る。それが目標です」。宇野はそう話した。(敬称略)

【依存～溺れるネット世界(2)】覚醒剤打ち一睡もせずネット株取引 「心の穴」埋めてくれる

産経新聞 2017年8月22日

日常生活では得られない「充足感」をネットトレードで埋めていたという(写真と本文は関係ありません)



インターネットが広く浸透し始めたとされる今から10年ほど前に、兵庫県出身の稲村聡一(43)はネットトレードにはまった。学業や仕事、結婚。「経歴」だけなら、どこにでもいるような40歳代の一般男性だが、平凡な生活に満足感を全く持てなかった。唯一、夢中にな

れたというネットトレードは、稲村を破滅へと向かわせた。

不眠不休の月～木、金曜に気を失う…「風呂に入る時間ももったいない」

ネットトレードにはまった当初はアパレル会社に勤め、営業成績はトップクラスだった。年間100日は出張していたものの、次第に仕事はメールで済ませ、出張先のホテルにこもってネットトレードに専念するようになる。

取引で100万単位で利益が出ると優越感を持てた。ただ、100万円の損失を出しても焦りはなかった。「まだ負けられる。いつでも取り返せる」。それぐらいの蓄えはあると思っていたし、自分は冷静に、夢中になっていると信じ込んでいた。

そして35歳の時に退社した。すでに離婚し、背負う家族はなかった。だが何より「風呂に入る時間ももったいない。取引を続けたい」という思いが、稲村を突き動かしていた。

それからは、大学時代のアルバイトの先輩から教えてもらったという覚醒剤を打ちながら月曜の朝から一睡もせずにパソコンの画面をにらんだ。食事はほとんどとらない。金曜に気を失い、2～3日眠って、月曜からまたネットトレードを始めた。

母親に死ぬほど暴力 親友もいない

稲村は幼少のころから何ごと「現実」と向き合うことができず、少しでもやっかいなことが起きると、すぐ逃げた。

比較的裕福な家庭に育った。仕事熱心で、家にほぼいなかった父親と遊んだ記憶はない。一方、母親からはいろんな習い事に通うよう勧められ、英会話に水泳、恥ずかしかったが、バイオリン教室にも行った。

微妙に歯車が狂い始めたのは、6つ下の妹が生まれたときから。母に「お兄ちゃんになるのよ」と告げられると、自分の問題は自らで解決しないといけないと思い込んだ。以来、

母や周囲に本音で話すことができなくなった。人と深く向き合ったり胸の内を話したりした経験はなく、親友と呼べる人は一人もいない。

ただ、勉強はできた。小4でIQ（知能指数）は160。教科書も1度読めば理解できたし、テストができない同級生を見て「教科書を読み忘れていたんだな」と思っていたほどだ。

もともと、性格の歪（ゆが）みは徐々に表に出始める。中学のころ、死んでもおかしくないくらい母に暴力をふるった。しかし「他の家にもよくあること」と特別な思いは抱かなかった。仲の良かったいとこの突然の死にも悲しみはわからず、泣き崩れる周囲に「演技している」と思った。

その後、高校、大学へと進学するとともに、暴力から賭けマージャン、酒、パチンコなどへと“興味”は移ったが、いずれも満足を得られなかった。

仕事でキャリア重ねても、結婚しても得られぬ充足感

大学卒業後に就職。昇進や昇給で満たされるのではないかと思いき、死にもの狂いで働いて順調にキャリアを重ねた。だが、周囲との関係はうわべだけにとどまった。

結婚も同じだった。仕事を始めてまもなく、学生時代から6年間同棲（どうせい）していた女性と、婚姻届を提出した。しかし、はんこを押した瞬間に感じたのは「終わったな」という思い。しかも、子供のころから両親が協力しながら家庭を築く様子を見ていなかったからか、いざ家庭を持ってもどうしていいか分からない。結局、「他に好きな人ができた」と適当な理由を並べ、半年で離婚した。

1人になり、人とのかかわりを避けた。ネットトレードにはまったのは、一日中、パソコンとだけ向き合い、部屋に閉じ籠もっていればいいというのも一因だった。だが、やがて破滅を迎える。最後は親に頼らざるを得ないような負債を抱え、2度も覚醒剤使用で逮捕された。

破滅してわかった「心に穴がある自分」

出所した稲村は、奈良県内の依存症回復施設で、依存に陥った心の内の絡まった糸をほぐす作業を続け、ようやく空虚感を抱いていた平々凡々な退屈な毎日が実は幸せなんだと思えるようになった。稲村は言う。

「心に穴がある自分をようやく認めることができた。いままでの経験を通じ、依存に苦しむ人の理由を探る手助けをしたい」

今はそれが幸せだと思っている。（敬称略）

【依存～溺れるネット世界（3）】ゲーム内の女性ルナディアナ溺愛 MMORPG「マビノギ」で出会った 実際は「おじさんだったとしてもよかった」



産経新聞 2017年8月23日

スマートホンを見ながら歩く女性。高本さんはオンラインゲームの中の「女性」と恋に落ちた（写真と本文は関係ありません）

熊本県阿蘇市出身の高本雅史（32）がインターネットのオンラインゲームの世界に逃げ込んだのは、大学3年の夏だった。やがてオンラインゲーム「マビノギ」に夢中になり、ゲームの中の女性「ルナディアナ」と出会う。「実際はおじさんが相手だったとしてもよかった」。

ルナディアナとの“交際”は実に6年にも及んだ。

なぜ自分だけが…

高校で1年留年していた高本は、年下に囲まれたキャンパス生活になじめず、いつも授業を1人で聞き、さびしさを抱え続けていた。3年の夏、ゼミの教授から夏休みを利用した酒蔵見学の課題が出され、教授はこう付け加えた。「みんなで協力するように」。だが、高本にはゼミに友人が一人もいなかった。

しかも、車の免許を持っておらず、交通の便が悪い場所にある酒蔵を1人で調べるのは難しい。「がんばればできないことはないかな」とも思ったが、次第に、なぜ自分だけが、こんな目に遭うのかと理不尽に思えてきた。

「(年下に囲まれ)ここまで耐えてきたのに、あざ笑われたような感じがして勉強への意欲が消えた」

だれかに「一緒に(仲間に)交ぜてよ」といえばよかったが、そんな勇気はこの時はなかった。自暴自棄になった高本は1人暮らしをしていたマンションに引きこもった。パソコンをいじっている中で、オンラインゲーム「マビノギ」に出合った。

言えないことが言える“夢の世界”

マビノギは、数百、数千人のプレイヤーが同時に参加できる「MMORPG」と言われるゲーム。多数のプレイヤーが参加する仮想世界にはコミュニケーションや人間関係も存在する。

一方で匿名性が保証され、現実では、なかなか言えないことも何でも言える夢のような世界だった。

そして、ゲーム上で、ある“女性”と出会う。「ルナディアナ」と名乗るその女性と話す中で、価値観や趣味があうと直感し、淡い恋心を抱いた。

「はまらない方がおかしかった。実際に会うことはなくルナディアナをおじさんが動かしていようと関係なかった」

一緒に料理し、音楽を演奏 珍しい服は迷わずプレゼント

ゲームでは、一緒に料理をしたり、音楽を演奏したりして、2人の時間を過ごした。めずらしい服のアイテムが手に入ると、迷わずプレゼントした。「自分の好意を示すことは何でもした」。バイト代をほとんど費やすなどしてゲーム内で料金を支払った。「ゲームの世界が現実で、実際の世界は出稼ぎ」という状態が続き、彼女に尽くした“交際”は、相手が突然ゲームにアクセスしなくなるまで6年にも及んだ。

感情押し殺した「人形」になる 父の暴力が契機

大学3年の夏、目の前の「苦」から逃げて始まったオンラインゲームへの依存。苦痛から逃げるやりようは、6歳に原点がある。父の暴力だ。風呂上がりにぬれたまま廊下を駆け回る高本に、激高した父は腹を思い切り蹴り上げた。

2メートルは飛び、しゃっくりが止まらなかった。その後も断続的に暴力は続き「(だれに対しても)自分の心を殺そう」と決めた。

感情を押し殺した「人形」に徹することで、目の前の壁には一切向き合わない生活が始まった。自分の思いを発散できないので、好きなゲームに没頭して心を保とうとした。

高校では、勉強への意義が見いだせず一時休学、大学も休学の末、中退。はたから見れば、すべて小さな出来事をつまづいた。アルバイト生活で、それなりにうまくいっているときもあったが、最後は、両親から無理やり勧められて始めた派遣の仕事になじめず、ゲームにのめり込んで消費者金融に手を出し、破滅した。

「人格形成の大事な時期に親からひどいことをされたから、こんな生活を強いられている。それを、すべての言い訳にしてきた」

大事なものは「自分を偽らずに出すこと」

昨年9月、関西の依存症回復施設に流れ着いた。ようやく自分と向き合う生活が始まったが、今でもゲームはしたいし、施設を出れば、きっと、またゲームに走るとも思う。ただ最近一つ気がついたことがある。仮に独りよがりでも自分を出さないと、周囲に理解してもらえず、人間関係は構築できないということだ。

「勇気はあるが、自分を偽らずに出せるようになると、生きやすくなった。それが分かっただけでもいいと思う」(敬称略)

【依存～溺れるネット世界(4)】毎日10時間プレイ 「サドンアタック」での称賛に喜

び 親への“報復”で殻に閉じこもり、高専や大学中退 産経新聞 2017年8月24日



現実の世界の“苦痛”から逃げ込む先がオンラインゲームだった
(写真と本文は関係ありません)

依存症は幼少期、適切な愛情を両親から受けなかったことから引き起こされるともいわれる。安らぐ環境を得られず、親の顔色ばかりをうかがい、感情を押し殺した「人形」のようになることで、さらに自分の感情が出せなくなる。だが、その反動でやがて耐え難い寂しさを感じ、爆発したり何かに頼ったりするようになる。

爆発は「一人暮らしを」というちっぽけな問題から

高等専門学校3年のころからインターネットの世界に溺れ始めた桂翔太(23)＝仮名＝の場合もそれと重なる。

幼少期に桂の両親の関係はぎくしゃくしていた。言い争いは絶えず、小学1年の時には「もう無理だ」と母が包丁を持っている場面も目撃した。「どっちについていくんだ」と迫られ、途方に暮れたこともあった。自然と顔色をうかがう生活を送り、「人形」に徹して親の言うがままの人生を送ってきた。そして“ちっぽけ”な「1人暮らし」という問題で爆発した。

桂は高専入学後から始まった寮生活になじめず、アパートでの1人暮らしを両親に再三訴えた。2年になると相部屋から1人部屋になって、環境は少しは改善したが、両隣の先輩が夜中にピアノを弾いたり歌ったりして耐えられなかった。

だが、両親は「常識的にだめ」「我慢しなさい」として、まったく取り合ってくれず、首を縦に振ることはなかった。

留年かかったテスト当日に広島に家出

小学校から、親の期待に応えようと勉強に励み、すべて親の勧める学校に進んだ。「この学校に行けば将来も安泰」とも言われた。

親の喜んでる顔を見るために努力をしてきたのに、なぜ自分の気持ちを受け止めてくれないのか。

両親への不満ばかりが募り、高3で完全に気力をなくした。学校をさぼって映画に行ったり、あてもなく東京に行ったりした。成績は落ちた。テストでは名前すら書かなかった。留年がかかったテストの当日には家出のように広島に向かった。

変わり果てた息子に、両親は焦ったが、それを見ても何も感じず会話を完全に遮断した。「今から考えればアホらしいことだが、自分の人生を失敗させることが報復だった」

逃げついた先が、対戦型のオンラインゲーム「サドンアタック」だった。仮想空間上で数人単位でチームを組み、銃器で相手を倒していくのだが、最初は難しく、なかなか思うようにいかず、イライラも感じた。ただ、少しうまくなるとネット上で知り合った仲間から称賛された。

仲間から必要とされる存在

「仲間から必要とされることはうれしく、自分の中にあいた穴を満たしてくれるように感じた」

サドンアタックは年数回行われる公式大会で5千人以上が参加するとされる。家族の期待に応えてきた桂の人生は、そうしたゲーム仲間の期待に応えることにすり替わった。

念願だった1人暮らしが認められたのは、留年が決まってから。しかし、「何を今さら」と親には感謝ではなく反発を抱いた。部屋にこもり、夕方から朝方まで毎日10時間ほどふらふらになるまでゲームに没頭。体を心配して、横に座って「翔ちゃん。大丈夫」と声を掛けてくれた母も無視してゲームを続けた。

ふとわれに返り、むなしさを感じることもあったが、母が涙をためて顔をはたいてきても痛みは感じず「こうなったのは当然の報い」としか思わなかった。

過度な期待を課す親VS「良い子」の顔しかできなくなった子供

結局、高専を退学。大検を取って大学に進んだが最後にはパチンコにものめり込んで消費者金融に手を付け大学も退学した。

ゲームで支払いがかさむことより、仲間に頼られることのほうがうれしく、ギャンブルや薬物のように抜け出せなくなるような恐怖感もなかった。だが、桂がはまったのは「期待に応えれば褒めてくれる、認めてくれる世界」がそこにあると感じたからだ。

親の過度な期待と、「良い子」の顔しかできなくなった子供。社会の歪（ゆが）んだ構造もまた、仮想空間に溺れる人を生み出している。（敬称略）



**【依存～溺れるネット世界（5）】 「サドンアタック」
達人 現実世界は「ズタズタ」 バイト続かずギャンブルに盗み** 産経新聞 2017年8月25日
ゲームの達人の現実世界は「ズタズタでみじめ」だったという（写真と本文は関係ありません）

大阪府東大阪市出身の濱田健太（29）はオンラインゲームの世界で名の知れた存在だった。出場した大会で優勝して雑誌にも取り上げられ、大阪・鶴橋の駅で見知らぬ男性から声をかけられたこともある。女性にも正直、もてた。だが現実の世界は違った。

共通の話題は「ゲーム」だけ

「ズタズタでみじめなものだった」

濱田は、極端ともいえる人見知りで、新しい人間関係をつくるのが苦手だった。「人にどう思われるのか」。絶えず周囲の目が気になり、相手に悪く思われまいと、いつも一歩踏み出せないでいた。例えば、進学した地元の私大の入学式。周囲の学生と何か話さなければと焦るだけで声をかけられず、結局、友人をつくれなかった。

高校と違い、大学は出席の管理が厳しくない。自然と足は遠のき、前期で10回くらいしか大学の敷地内に足を踏み入れなかった。逃げた先が、高校生のころから好きだったオンラインゲームだった。

ここなら、顔を合わすこともなく、何を話そうかと話題を考える煩わしさはない。共通の話題は、互いのパソコン画面に映るゲーム。濱田がはまった「サドンアタック」はチームによる対戦型の戦闘ゲーム。知らない者同士が仮想空間上で“仲間”となり、相手に勝つことを目指す。

濱田は「本当に居心地が良かった」と振り返る。

昼夜逆転の生活 「午後10時からゲーム 朝に寝て夕方バイト」

1年の夏休みに大学を退学。大学から返金された授業料を元手にゲーム専用のパソコンを購入する。

そしてサドンアタックに“仲間”が集まる午後10時から朝方まで没頭し、夕方のアルバイトまで眠る昼夜逆転の生活が始まった。

自分のパソコンを手に入れ、のめり込んだことでゲームの技術がどんどん上達した。すると、ただ単に楽しむだけではなく、周囲から称賛を浴び、快感も得られるようになった。自分の腕を試したくもなり、ゲームで知り合った仲間とのチームで、公式大会で日本一に上りつめた。20歳のときだった。

生まれて初めて、周囲からちやほやされ、ゲームの中で遊んでいた人と、実際に飲み会などを開く「オフ会」にも出席、現実のコミュニティーもできた。「ゲームの延長線上で共通の話題があり、現実も、それはそれで楽しかった」

現実と仮想も逆転

ただ、それも「仮の姿」だった。昼夜の生活が逆転したように、現実の世界と仮想の世界が、逆転してしまっていたからだ。

ゲームに溺れれば、溺れるほど歯車は狂った。時間を忘れるほど熱中し、アルバイトに行くのが、ままたらなくなる。普通の生活の中で優先しないといけないものよりもゲームが大事だった。いくら疲れていてもゲームで集合のかかる時間には間に合わせた。

一方でバイトは一度ズル休みすると、次に行きにくくなり、逃げる選択を繰り返した。当然、ゲーム内の料金の資金に困るようになった。「ネットに専念する時間がほしい」と手っ取り早く現金を手に入れる手段として、パチンコやスロットに手を出した。

母の財布から札を抜く

負の連鎖は続く。ギャンブルは損するばかり。母親の財布から現金を抜いた。女手一つで育ててくれた母が必死になって稼いだお金ではなかった。弟の漫画を勝手に売って換金した。現金が抜かれて、怖くなった母が財布を隠すようになって、母が家にいない隙を見つけて部屋をあさって探し出した。

「オフ会での仲間には今までやってきた仕事を今もやっていると偽り、演技していた。結局、ネットでの仲間にも現実には本心が話せなかった」

コンビニのレジからも30万円抜く

濱田は、そうした生活を実に7、8年も続けた末にバイト先のコンビニエンスストアのレジから30万円盗み取った。結局、刑事罰に問われることはなかったが、依存症回復のための施設に入所させられることになった。濱田は言う。

「妄想を現実のように感じさせるのがネット。身近にあふれ、薬物やギャンブルに溺れるのと違い、問題が表れにくい。それだけに根深く、怖い」(敬称略)

障害者支援の給付金詐取疑いで再逮捕、被害新たに2千万円 福岡

産経新聞 2017年8月28日

福岡県警は28日、障害者支援の給付金約2千万円を福岡市からだまし取ったとして、詐欺の疑いで住所不定の無職、中橋武彦容疑者(42)と、福岡市城南区南片江、無職、平田敏之容疑者(35)を再逮捕した。2人の逮捕は3度目で、立件分の被害額は計約7800万円となった。

2人の逮捕容疑は、障害者の就労支援を名目に事務所を設立、サービスを提供したように装い、平成27年12月から28年10月にかけて計約2千万円をだまし取った疑い。

市は計約1億6千万円の不正受給が確認されたとして、この2人のほか、事業所の代表ら6人を告訴している。

新型出生前診断は「認定施設で」 産科婦人科学会が呼びかけ

産経新聞 2017年8月26日

妊婦の血液から胎児の染色体異常を調べる「新型出生前診断」について、日本産科婦人科学会は26日、日本医学会の認定を受けた施設で行うよう妊婦への呼びかけを始めた。

平成25年から臨床研究として開始された同診断は、遺伝カウンセリングで正しい情報提供が行われなければ安易な中絶を助長する可能性があるが、情報提供を行わない認定外施設が検査を請け負う例が報告されている。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行